

弥生時代のはじまり — 稲作の始まりと蓮田 —

今から約2,400年前(紀元前400年頃)に、大陸や朝鮮半島からの稲作農耕や金属器など新しい技術や文物を受け入れ、西日本で弥生文化(やよいぶんか)が始まりました。やがて弥生文化は縄文文化的な暮らしを続けていた東日本にも伝わり、紀元前1世紀頃までには米作りで生活するムラが各地にみられるようになりました。弥生時代の終わり頃(約1,700年前)には、水田開発などの集団作業や外敵との争いの中から、ムラより広い地域をたばねる指導者たちが出現するようになりました。また、集落の周囲を溝で囲む「環濠(かんごう)」と呼ばれる施設が造られるムラも出現します。

県内に弥生文化が伝わったのは紀元前2世紀頃(約2,200年前)と考えられますが、人々の暮らしには縄文文化の伝統がまだ色濃く残されていました。蓮田市内でも弥生時代の遺跡

は18ヶ所で確認されていますが、水田農耕の痕跡、木製や石製の農具等の当時の痕跡は発見されていません。明確な弥生時代の遺跡は、宿下遺跡で発見された「再葬墓(さいそうぼ)」と呼ばれる墓(土器の中に骨のみを入れる)だけです。周辺地域でも関東東地方で言う弥生時代の始まりの時期であるこの頃の遺跡は貴重な例であり、隣接する部分などで住居が発見されることと思います。墓からは副葬品として管玉(くだたま)が出土していますが、縄文時代のものと比べると非常に細く、製作技法の向上が窺(うかが)い知れます。

また、周辺では市域に隣接するさいたま市岩槻区木曾良遺跡(きぞらいせき)で集落跡や環濠が確認されています。

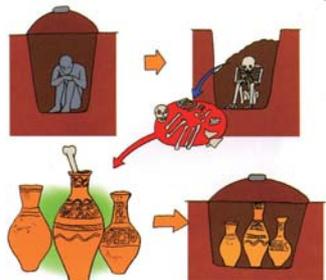
なお、最近では弥生時代の始まりを紀元前900年(約2,900年前)まで遡(さかのぼ)らせる説もあります。

古墳時代の幕開け — 古墳時代の幕開けと蓮田の人びと —

今から約1700年前(3世紀後半)頃、弥生時代の終わり頃から成長をとげた豪族(ごうぞく)達が全国各地で大規模な墓「古墳(こふん)」を築き始めました。豪族たちのリーダーは奈良県や大阪府に巨大な前方後円墳(ぜんぽうこうえんふん)を築いた「大和政権(やまとせいけん)」と考えられています。その後、6世紀の終わり頃まで前方後円墳は各地で造り続けられ、この間を古墳時代と呼んでいます。古墳の形には、前方後円墳の他に、前方後方墳(ぜんぽうこうほうふん)や円墳(えんふん)、方墳(ほうふん)などがあり、築造に高い土木技術が必要でした。

県内で古墳が造られたのは4世紀前半からと考えられ、行田市国指定史跡埼玉古墳群(さきたまこふんぐん)は、大型の前方後円墳を中心とする5世紀末から6世紀末の古墳群です。その内の1つの稲荷山古墳(いなりやまこふん)からは国宝の金錯銘鉄剣(きんさくめいてっけん)が出土しました。金錯銘鉄剣は『辛亥銘鉄剣(しんがいてっけん)』とも呼ばれ、金象嵌(きんぞうがん)で115文字の銘文が記されており、古墳時代を研究するうえでの第一級の資料となっています。また、吉見町国指定史跡吉見百穴(よしみひやくあな)は、横穴墓(おうけつぼ:台地や段丘の斜面に穴を掘り埋葬した施設)と呼ばれる終末期古墳の一種です。

古墳時代の遺跡は市内50ヶ所確認され、人々が生活の場とした集落を始め、久台遺跡では3世紀に方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)と呼ばれる墓が造られました。集落は谷を隔てた南側(ささら遺跡)に営まれ、墓域を北側に造営したものです。周溝の中からは土師器(はじき)の壺(つぼ)や高坏(たかつき)が発見されています。また、この時代からも貝塚2ヶ所が確認されています。市内で古墳が造られるのは5世紀中頃、椿山古墳群(つばきやまこふんぐん:大字黒浜、市役所)に円墳が造られ、周濠からは、関東で最古級の須恵器(すえき)や土師器の壺や高坏(たかつき)が発見されました。この頃の埼玉古墳群では、巨大な前方後円墳が造られ始め、馬込八番遺跡からは、稲荷山古墳と同時期の埴輪を持つ、周辺でも最古の埴輪(5世紀後半)が発見されています。この後も中小規模の古墳が多く造られ、群集墳(ぐんしゅうふん)が形成されました。蓮田では荒川附遺跡(関山3,4丁目)や帆立山(ほだつやま)遺跡(馬込2,5,6丁目)で集落が営まれ、7世紀代に十三塚(じゅうさんづか)古墳群(大字関戸字野久保)やささら古墳群(東3,4丁目)、椿山古墳群、久台遺跡で古墳が造られ、古墳からは副葬品として、金環(きんかん)や勾玉(まがたま)、直刀など多くの副葬品が発見されています。



再葬墓ができるまで「図解日本史」より
最葬墓(さいそうぼ)とは、文字どおり、葬り直されたお墓のことです。宿下遺跡からは、土器に埋葬されたもの(下写真)が発見されています。中からは管玉(くだたま)が発見されており、副葬品(ふくそうひん:展示品)と考えられます。



稲作伝来ルート「図解日本史」より



弥生時代の稲作のようす「図解日本史」より



- 弥生時代の遺跡
- 古墳時代の遺跡
- 古墳時代の貝塚遺跡
- 方形周溝墓
- 凸 古墳



再葬墓(宿下遺跡)



十三塚古墳全景

市内の古墳

市内の古墳は、6世紀の中頃から7世紀末にかけて築造され、榑山遺跡(市役所)、さら遺跡、十三塚遺跡などで発見されています。これらは群集墳(ぐんしゅうふん)と呼ばれる終末期の古墳が大部分であり、埼玉古墳群に代表されるような前方後円墳と呼ばれる大型古墳は、現在まで市内では発見されていませんが、同時期(6世紀後半～未葉)の埴輪を持つ古墳がさら古墳群に属する馬込八番遺跡で発見され、周



十三塚古墳 (全景) (古墳時代後期：約1,400年前)

十三塚古墳の大きさは、径24.0m、周濠の幅2.6m、深さ50cm、の円墳(えんぷん)です。主体部(右写真)は、構穴式石室(よこあなしきせきしつ)で、蓮田市域に特徴的な硬砂層(かたすなそう)砂岩を使用した切石(きりいし)切組(きりくみ)積(つみ)石室(せきしつ)で胴貼りの榑室構造(かたはりのこむらぎたて)が採用されています。また、床には「礫床(れきしょう)」と呼ばれる2～3cmの小石が敷き詰められています。



榑山遺跡 1, 2号古墳(古墳時代中期：約1,550年前)
榑山遺跡の古墳は、十三塚古墳等よりは古く6世紀中頃と考えられています。

辺地域で最も古い埴輪となります。周辺では、久喜市相間(かやま)に100mを超える天王山塚古墳が最大級の前方後円墳です。なお、近年では久台遺跡からも7世紀代の古墳が発見されています。



十三塚古墳 (石室)

埴輪は、透かし穴(写真左)が開けられる他、小さな穴(写真右の穴)が開けられていることが特徴があります。

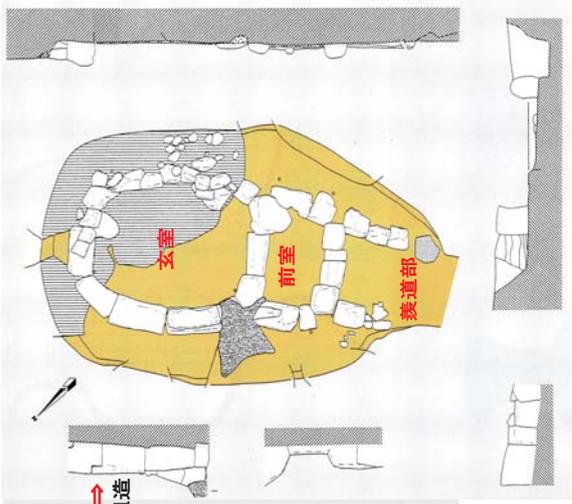


馬込八番5号古墳出土埴輪 (古墳時代中期:約1,500年前)



周辺最大の古墳

天王山塚古墳(久喜市相間)の大きさは、全長110m、後円部径55m、前方部径67mで、二重周濠を持つ埼玉古墳群などと変わらない構造のようです。



石切組造(きりくみくくり)状に加工され、通常の構造より石が崩れないような工夫がされています。出土品も市内古墳では最も多く、鉄剣2振り、勾玉2点、鉄鏃30数点、須臾器長頸壺3点(東海地方産)他が発見されています。



十三塚古墳 (石室復元図)

十三塚古墳の石室は、市内では一例のみの『榑室構造(ふくしつこうぞう)』を持つものです。さら遺跡や榑山遺跡の石室は、「義道部(せんとどうぶ)」と呼ばれる入り口施設から直接「玄室(げんしつ)」と呼ばれる埋葬施設に直接繋がる構造ですが、十三塚古墳ではこの間に「前室(ぜんしつ)」と呼ばれる施設が造られています。また、石室も中央が膨らんだ胴張りの形態で、一般的な石室(四角形形態とは異なる)の石材は『硬砂層(かたすなそう)』と呼ばれる市内でも入手できる石のように硬い砂が、『切